

村上紀夫著

## 『近世京都寺社の文化史』

石津裕之

本書は、著者が発表してきた九篇の既出論文を元とし、新稿を加えて再構成したものであり、「近世勧進の研究——京都の民間宗教者」(法藏館、二〇一一年。以下、前著)に続く著者の第二論文集である。詳しくは後述するが、本書は、都市史・宗教史・文化史にまたがる歴史的な現象を論じた意欲的な著作である。以下、書評の通例にしたがい、各章の要約を示した上で、本書の研究史上の意義や論点・課題について述べることとする。

### 一 各章の要約

序章に当たる「ある岩の歴史——序にかえて——」では、西陣に祀られる岩の信仰史を糸口とし、本書の課題設定がなされる。まず、住民と氏神・檀那寺の強固な関係が結ばれにくいといった、都市固有の信仰を規定する環境条件を列举し、都市の寺社は、こうした条件下で信仰を集め、経営基盤を確保する必要があつたとする。さらに特に近世

京都の寺社にとって、賽銭といった「信仰経済」の持つ意義が大きかつたと指摘しつゝ、住民の信仰と寺社の働きかけが結びついたところに、近世都市京都ならではの信仰や宗教文化が創出されたのではないかと提起する。また、經濟基盤が脆弱であるがゆえに、その動向が多様な都市の信仰や住民の姿をより鮮明に反映しているとの理由から、寺社領や広大な氏子圈などを持たない「中小規模の寺社」を主な分析対象とすることが説明される。そして、寺社の多様な生存戦略を明らかにし、その背景にある宗教的需要から見た、近世都市京都の抱える諸問題を浮き彫りにするという本書の目的が掲げられる。

第一部「都市の信仰と神社」では、名所化や現世利益の宣伝などの手段を通じて、資金調達を行った洛中及び京都近郊の神社の姿が検討される。

第一部第一章「京都の町と神社——六・一七世紀における菅大臣社の動向から——」は、菅大臣社が菅原道真を祀る神社として宣伝されるようになる過程を町を含む諸主体の動きから論じる。中世以来の菅大臣社と町の関係を見た上で、菅大臣社の北社を金剛園・常喜院が、南社を曼殊院が管理していたことを確認する。そして、元禄期に菅公八〇〇年祭を機に天神信仰が高揚すると、曼殊院は南社を觀光資源化することで参詣者を集める方針を取つたと指

ようになつていつたとする。

第一部第二章「近世中期における祇園社本願と『同宿』」は、祇園社の本願が得られたことなどを解説する。しかし、嘉永期に再び常喜院が同様の宣伝を行うと、今度は曼殊院の主張は退けられ、事实上常喜院の主張が認められるに至る。その背景には、常喜院が境内に荒木天満宮を祀り、「北菅大臣社」として社会に認知を得たことなどがあつたと指摘する。

第一部第三章「近世中期における祇園社本願と『同宿』」は、祇園社の本願が得られたことなどを解説する。しかし、嘉永期に再び常喜院が同様の宣伝を行うと、今度は曼殊院の主張は退けられ、事实上常喜院の主張が認められるに至る。その背景には、常喜院が境内に荒木天満宮を祀り、「北菅大臣社」として社会に認知を得たことなどがあつたと指摘する。

第一部第三章「近世中期における祇園社本願と『同宿』」は、祇園社の本願が得られたことなどを解説する。しかし、嘉永期に再び常喜院が同様の宣伝を行うと、今度は曼殊院の主張は退けられ、事实上常喜院の主張が認められるに至る。その背景には、常喜院が境内に荒木天満宮を祀り、「北菅大臣社」として社会に認知を得たことなどがあつたと指摘する。

第一回第四章「九世紀京都近郊の神社と神人——日向神明社にみる——」は、日向神明社の経営を分析しつゝ、近世神人像の再検討を試みたもの。寛政期に神主となつた中津河氏は、資金源の札を「伊勢両宮御印」を銘打ち、伊勢神宮と所縁があるかのような権威づけを行うことで商品価値を高めようとしていたとする。また、同社の神人は、中世との連続性を持つておらず、一九世紀の日向神明社固有の条件下に誕生した存在であつたと評価する。

第一部補論で「迷子社」とその信仰史は、迷子発見の祈願を受けた、かつて小路通新町西にあつた祠について、戦国期から明治初頭までの展開を跡づける。

第二回第一章「近世阿弥陀ヶ峰の火葬と良恩寺——火葬施設・寺・町——」は、栗田口村付近の阿弥陀ヶ峰火葬場とそれを管理していた良恩寺を素材として、火葬院の運営から、都市に多く発生する無縁の死者的火葬・埋葬、供養が検討され、都市固有の靈魂観・供養觀が析出される。

第二回第一章「近世阿弥陀ヶ峰の火葬と良恩寺——火葬施設・寺・町——」は、栗田口村付近の阿弥陀ヶ峰火葬場とそれを管理していた良恩寺を素材として、火葬院の運営から、都市に多く発生する無縁の死者的火葬・埋葬、供養が検討され、都市に多く発生する無縁の死者的火葬・埋葬、供養が析出される。

元禄期には、火葬は良恩寺の粟田口村住人によつて使用されたことなどが記録されているが、草保期になると、良恩寺の主導で、貧困層を対象に京都住人の墓場になつていく。しかし、享保八年(一七三

三)に青蓮院が火葬の操業停止を命じると、町場化が進み良恩寺檀家ばかりではなくなつていていた粟田口村住人は青蓮院を支持する。こうした事実などを踏まえ、著者は、寺院檀家・村・町の相互関係といつた諸条件が絡まる中で京都における葬送が変化していたと評価する。

第二回第二章「近世京都における無縁墓地と村落寺院」は、白蓮寺付近にあつた無縁墓地(檀那寺を持たない無縁の死者を埋葬した墓地)を対象とし、無縁墓地の実態を分析したもの。この無縁墓地が、白蓮寺のあつた東福小路村の住人が使う惣墓の一角にあつたことなどを実証した上で、京都の南玄関門である同村付近では、早い時期から行き倒れが多く発生し、彼らが村の惣墓の一角に設けられた無縁墓地に埋葬されるようになつたと想定する。

第二回第三章「無縁墓地『南無地藏考』」では、東山にあつた無縁墓地南無地藏の実態が分析される。近世前期の京都では飢餓が発生すると大量の遺体が鴨川の河原に投棄されていたが、こうした行為は河床の上昇に繋がるものであつたため、鴨川の洪水对策を進めべく、公儀癩力は既存の無縁墓地南無地藏の調査し、その中で南無地藏は元禄期に至つたことなどを公認されるに至つたのだ。南無地藏は、京都住民にとって、供養される大量の死者の記憶と結びついた場所となつて、こうした供養される死者の「亡魂」が都市に出ていき、こうした供養される死者の「亡魂」が都市に

民間宗教者の位置づけを既往の研究に比して明確にしているのである。著者が示した宗教的需要の性質とそれに応じた活動という観点は、今後、近世民間宗教者の諸相を追究していく上で、改めて意識されるべき有効な視角であると思われる。

第四に、近世都市の文化研究に関連づけつつ、本書が編まれている点である。序章で著者は、大桑音の指摘を引用する形で「近世都市の文化研究が遅れている」とした上で、同じく大桑の論考を援用しつつ、都市の「聖」と「死」に着目して「都市の文化を考えてみたい」と述べている(二七一八頁)。大桑の論考は、都市の神聖性といつての観点から都市文化を捉えることを試みたものであり、大桑と同じく「聖」の問題を取り上げつつも、新たに「死」の問題を取り上げたのは、都市文化に関する大衆の問題提起と成果を発展させたものといえ。また、配札や都市固有の靈魂観・供養觀は、從来であれば、宗教史研究が分析対象として取り上げてきた問題と思われ、それらを宗教史の枠組みにとどめず、都市文化の問題として評価しようとして、研究の進展を企図している点に本書の大きな特徴がある。その意味で、書名を『近世京都寺社の文化史』と銘打つたことも印象的である。但し、都市文化に関する先行研究整理の方法については、思うところもある。詳しくは

後述する。

まず、大規模の寺社についてである。著者は、主たる分析対象とした「中小規模の寺社」について、「広大な氏子園や十分な数の檀家・寺社領を持つことのない」寺社と説明する(一八頁)。本書の大部分は、この「中小規模の寺社」が対象となっているが、終章では「一八世紀末になる」と前述のとおり大小の寺社が、競うかのように多様な御利益をうたつて配札を行ひ(三二七頁)。傍点は評者のように、「中小規模の寺社」のみならず、大規模の寺社にも自己がなされている。前引の「中小規模の寺社」の定義に基づけば、寺社領を持つ寺社は大規模の寺社ということになるのであろうが、そうした経済基盤の安定している寺社は相応の人数の組織から成っており、末端の構成員となるのは、寺社領の配分は少なく、経済基盤は「中小規模の寺社」のそれに近くなるため、そうした経済基盤の不安定な構成員が特に主張的に配札を行い、「中小規模の寺社」と競合していたという説明を思いつくのであるが、著者の

見解はどうであろうか。大規模の寺社は本書の主たる分析対象ではないものの、前引のごとく終章では言及がなされている以上、「中小規模の寺社」の実態を追究した著者ならではの、大規模の寺社の動向に関する説明が欲しかったところである。著者は、空也堂についての説明を以下に示す。

第二に、寺院の本末関係についてである。著者は、空也堂が大坂で収容僧衆を執行した源光寺が無本寺であつたことに触れつつ、源光寺が「ある面で宗派性を超えた存在であつたことは、近世を通じて本末関係も曖昧であったとされる空也堂とも親和性が高かつた」と述べている(二五五頁)。無本寺をめぐっては、「教團による包摂度合い」などが論点になつており、如上の説明は無本寺の特質を捉えたところに興味深い。一方、阿弥陀ヶ峰火屋を管理した良恩寺については、淨土宗西山派に属したという事実に触れていて、必ずしも檀縁を介すことなく下層民や貧困層の火葬場を関わった寺院を広く仏敎教団の問題として捉え、分析の結果を京都のみならず、全国的な動向の中に位置づけること

もできたようだと思われるのだが、どうであろうか。

最後に、都市の文化をめぐる先行研究の評価についてである。著者は、都市の文化をめぐる先行研究についてで最も注目する点は、近世都市の文化研究についてである。著者は、都市文化を從来の近世都市の文化研究についてで評議的なものにすぎず、都市に生きる人びとの心性を理解することに関しては「一面的」であると批判する(一七頁)。一方、終章を見ると、序章では触れられていない先行研究が引用され、各章の分析結果と関連づけつつ、叙述がなされている。その先行研究の中には、都市では個人祈願に応える多様な神仏が創出されることを述べた宮田登の論考が含まれ、文化の信仰として取り上げようとする本書の視点を都市文化の問題として取り上げようとする本書の視点が立つとき、これらの研究は、まさに都市文化の端を論じたものであるといえ、しかも都市文化の「利郷的」草業的ではない局面を分析しているように評者の目には映る。つまり、本来であれば、これらの研究は、從来の都市文化研究の蓄積・成果として、序章で適切に取り上げるべきものであつたように思われるのである。仮にそうした評者の見立てが違っていたとしても、序章では前述した大桑の論考に触れるだけではなく、都市文化に関する先行研

究を今少し多角的かつ具体的に取り上げ、それらに対する先行研究を京都のみならず、全国的な動向の中に位置づけること

民間宗教者の位置づけを既往の研究に比して明確にしているのである。著者が示した宗教的需要の性質とそれに応じた活動という観点は、今後、近世民間宗教者の諸相を追究していく上で、改めて意識されるべき有効な視角であると思われる。

第四に、近世都市の文化研究に関連づけつつ、本書が編まれている点である。序章で著者は、大桑氏の指摘を引用する形で「近世都市の文化研究が遅れている」とした上で、同じく大桑の論考を援用しつつ、都市の「聖」と「死」に着目して「都市の文化を考えてみたい」と述べている(二七)一八頁)。大桑の論考は、都市の神聖性といつた観点から都市文化を捉えることを試みたものであり、大桑と同じく「聖」の問題を取り上げつつも、新たに「死」の問題を取り上げた本書は、都市文化に関する大桑の問題提起を発展させたものといえる。また、配車や都市固有の靈魂觀・供養觀は、從来であれば、宗教史研究が分担対象として取り上げてきた問題と思われ、それらを宗教史の枠組みにとどめず、都市文化の問題として評価しようとした、研究の進展を企図している点に本書の大きな特徴がある。その意味で、書名を「近世京都寺社の文化史」と銘打ったことも印象的である。但し、都市文化に関する先行研究整理の方法については、思うところもある。詳しくは

後述する。

まず、大規模の寺社についてである。著者は、主たる分析対象とした「中小規模の寺社」について、「広大な氏子園や十分な数の檀家、寺社領を持つことのない」寺社と説明する(二八頁)。本書の大半は、この「中小規模の寺社」が対象となるが、終章では「一八世紀末になる」と、前述のとおり大小の寺社が、競うかのように多様な御利益をうたつて配札を行い。(三一)七頁)傍点は評者)のよう、「中小規模の寺社」のみならず、大規模の寺社も目配りがなされている。前引の「中小規模の寺社」の定義に基づけば、寺社領を持つ寺社は大規模の寺社と「い」とになるのであろうが、そうした経済基盤の安定している寺社は相応の人数の組織から成っており、末端の構成員となれば、寺社領の配分は少なく、経済基盤は「中小規模の寺社」のそれに近くなるため、そうした経済基盤の不安定構成員が特に主体的に配札を行ひ、「中小規模の寺社」と競合していたといふ説明を思いつくのであるが、著者の

もできたように思われるのだが、どうであろうか。

最後に、序章で從来の近世都市の文化研究についてである。著者は、序章で從来の近世都市の文化研究について、「盛り場や遊郭、居小屋といったハレの部分を重視した研究はあるが、こうして浮かび上がる都市の文化は利那的で享楽的なものにすぎず、都市に生きる人びとの心性を理解することに関しては一面的である」と批判する(七頁)。一方、終章を見ると、序章では触れられていない先行研究が引用され、各章の分析結果と関連づけつつ、叙述がなされている。その先行研究の中には、都市では個人祈願に応える多様な神仏が創出されることを述べた荻田登の論文である。都市の信仰として取り上げようとする本書の視点が都市文化の問題として取り上げようとする本書の視点立つとき、これらの研究は、まさに都市文化の一端を論じたものであるといえ、しかも都市文化の「利那的で享楽的」ではない局面を分析しているように評者の目には映る。つまり、本来であれば、これらの研究は、從来の都市文化研究の蓄積・成果として、序章で適切に取り上げるべきものであったようと思われる。仮にそうした評者の見立てが違っていたとしても、序章では、前述した大桑の論考に触れるだけではなく、都市文化に関する先行研究を今少し多角的かつ具体的に取り上げ、それらに対する

見解はどうであろうか。大規模の寺社は本書の主たる分析対象ではないものの、前引のごとく終章では言及がなされている以上、「中小規模の寺社」の実態を追究した著者ならではの大規模の寺社の動向に関する説明が欲しかったところである。著者は、空也第一に、寺院の本末関係についてである。著者は、空也が大阪で歡喜踊躍念佛を執行した源光寺が無本寺であつたことに触れ、「源光寺が『ある面で宗派性を超えた存在であつたことは、近世を通じて本末関係も曖昧であったとされる空也堂とも親和性が高かった』と述べている(二五頁)。無本寺をめぐつては、「教団への包摵度合い」などが論點になつており、如上の指摘は無本寺で執事した良恩寺上院の興味深い。一方、阿弥陀峯火屋を管理した良恩寺については、淨土宗西山派に属するという事実に触れていて、その(二九五頁)史料的制約にもよるのであるが、良恩寺の教団内における位置づけまでは論及がなされていない。近年、近世仏教団の編成原理をめぐる議論は、宗派性も意識しつつ、全国に及ぶ個別事例の総合化が模索される段階に至つており、こうした議論と関連づけることで、必ずしも僧縁を介すことなく下層民や貧困層の火葬に関わった寺院を広く仏教教団の問題として捉え、分析の結果を京都のみならず、全国的な動向の中に位置づけること

著者の見解をより踏み込んで示すべきであつただろう。そうすることと、著者の考える都市文化の内容も理解しやすくなり、都市の文化研究として見た本書の研究史上の意義も、一層鮮明になつたようと思われる。とはいへ、都市文化研究が遅れているとの著者の指摘は正鵠を射ており、本書の問題提起・成果を受け、改めて都市文化とは何なのか、その分析視点はどこに設定すべきなのかを議論することが今求められていよう。

以上、本書への意見を述べてきた。評者の浅学により、本書の意義を十分に述べられたかは不安であり、誤読もあるかもしれない。著者のご海容を乞う次第である。著者が丹念に描き出した都市における寺社や民間宗教者の姿は、冒頭にも記したように多くの分野に関わるものである。本書が広く読まれ、各分野の研究が進展することを期待したい。

(1) 朴澤直秀「近世の仏教」(『岩波講座日本歴史』一、岩

波書店、二〇一四年)、二七一~二七三頁。

(2) 大桑齊「都市文化のなかの聖と性」(『民衆仏教思想史論』ペリカン社、二〇一三年)。

(3) 終章で触れられている事例を見る限り、摂津西宮神社(二九九頁)、北野天満宮、祇園社(三〇一~三〇三頁)などが大規模の寺社として念頭に置かれているようである。な

お、補足しておくと、大規模の寺社という用語は、著者の用いたものではなく、評者が書評に当たり便宜上使用したものである。

(4) 朴澤直秀「本末帳に載らない「無本寺」寺院—摂津国八部郡・再度山大龍寺」(『近世仏教の制度と情報』吉川弘文館、二〇一五年、初出二〇一三年)、一〇三頁。

(5) 前掲註(1)朴澤論文など。

(6) 宮田登「江戸のはやり神」(ちくま学芸文庫、一九九三年)。

(二〇一九年一〇月刊、法藏館、三五六頁、八〇〇円+税)